

# バンコク10名の 未帰還兵

佐藤 幸憲 陸自60

1 「終活」で絵画類を整理中に、額入り12号大の絵を改めて見た。1984年（昭和59年）春、在タイ大使館勤務を終える頃、バンコク在住の未帰還兵の皆さんから頂いた絵画である。

2 大東亜戦争敗戦と共に、東南アジア各地ではベトナムやインドネシアのように、わが将兵が植民地からの独立戦争に身を投じ、帰国が遅れたり、不幸にして命を失ったりした話は、かなり詳しく伝えられている。

3 敗戦に伴い、わが国の軍人及び民間人は、共に連合軍に拘束された。バンコク北東140kmのナコンナーヨック近郊に収容された軍人は約7万名であり、ビルマから国境を越えてタイに撤退してきた将兵を含めると、最終的には12万8千名を越したといわれている。

このほか、度々報道されてきた例としては、タイ北部ビルマ国境地域の未帰還兵、慰霊のためチェンマイ近郊に残った兵士の話がある。

一時期、「逃亡者」が千名を超すと云われたが、混乱が収拾に向かうと、集結も進み、戦犯容疑を受けたものを除き、帰国が始まった。その完了は昭和22年10月であった。

しかし、最終的には帰国せず、未帰還者となった者の数は不明だとされ、200〜900名という数字もあるが、信じられる数字は残っていない。

一方、バンコク北方30kmのパンプアトーンに抑留された在留邦人数は約3000人であり、軍協力者調査の後、昭和21年6月、特別に在留を許可された126人を除き、「辰日丸」にて帰国した。



と共に、北の残留兵士約600名は日本に帰還させられたが、北ベトナムに残された妻子、孫等で作る家族会については現在もしばしば話題となっている。

一方、タイはわが南方軍の大兵站基地として機能し、攻守同盟国として、タイ空軍機が連合軍爆撃機を迎撃したり、両軍の軍事施設、鉄道、橋梁等の空襲、バンコク大空襲（新築日本大使館が焼失した）にも耐え、集計すると国家予算を上回る軍費をまかなうため特別円を設定・負担し、わが日本軍を支援した。その裏で秘かにロンドンに本部を持つ反日地下組織（自由タ

イ運動）を逐次拡大していた。加えて、終戦直後の昭和20年8月16日、対米英宣戦布告無効宣言や、連合国内の亀裂を利用する等、巧妙な外交により敗戦国となることなく、連合軍を神妙に迎えたため、国内で戦争や混乱は起きていない。

では、未帰還者について見てみよう。開戦前のタイの国民感情は、日本に対する知識及び関心の低さから、親英国が9割、親日本が1割と云われていた。

これを逆転させるためには、駐屯するわが軍が、独立国タイの国民感情に對する理解と敬意、そして自らの厳正な軍紀の保持が不可欠の筈であった。

しかしタイ国民は耐え、仏教徒として「慈悲の心」を持って、ビルマ等から疲弊して戻ってきたわが国の将兵に自宅等で食物、休養、治療等の援助の手を差し伸べた話が多い。これも後に未帰還兵が多く出たという噂の理由の一つとなっている。

4 「戦友会」10名の離隊理由は様々である。捕まれば戦犯として死刑になるとの噂を恐れた者、日本の家族が空襲で亡くなった報せを受け帰国意欲を失った者、タイ駐屯部隊勤務間に親しいタイ人女性が出来た者、帰国しても苦しい生活しか考えられずタイに希望を託した者等である。

私が赴任した昭和56年には、既に各人がそれぞれ生活基盤を築いていた。「戦友会」のまとめ役である元軍曹は

官庁街近くの「ニュー・アマリンホテル」の社長であり、既にその風格を備えていた。一階のロビーやレストランは客で埋まっていることも多く、後にクーデターで名前の出た同期生達もよく見かけた。「アマリンホテル」は繁華街の一角にあり、利用しやすい雰囲気と、日本料理、中華料理の評判も良く、訪タイや在任の日本人の多くが利用した。「ニュー・アマリンホテル」はこの時のノウハウを生かしたものと考えられる。

日本大使館のローカル・スタッフには、元曹長と軍属が採用されていた。元曹長は文化センターで広報を担当し、長身・温和な教師を思わせる風貌であった。主として日本紹介の映画を利用し、地方を巡回していた。元軍属は大使館本館の警備に就き、その厳しい表情が似合っていた。腰に多種多様の鍵を吊り下げ、館内を巡視していた姿が記憶に残っている。

昭和36年4月、辻政信元大佐は参議院議員として、国際紛争化したラオス情勢を解決すると称して各国を巡り、タイからラオスに入国以降、行方不明となった。4月14日朝、ラオスに向かうためにタイ大使館への挨拶を終えた辻議員を、正門まで見送った元軍属

本人でしよう」と云っていた。

元軍属の娘さんは、現地の東京銀行(当時)の窓口係として、独特の日本語と笑顔で親しまれ、在留邦人の信頼を得ていた。

同じく第10特設鉄道運輸隊で準軍属だったという医師がいた。敗戦後、在留邦人は特例3要件に該当する者126人のみタイ在留を許されたが、その要件の一つに「医師」があった。残留後は、早い時期に医院を開設したと伝えられており、穏和な性格で腕も良いとの評判から、タイ人のみでなく在留邦人にも人気があった。

このほかのメンバーは日本製電化製品販売(兵長)、日本車サービスマン(上等兵)、大手商社現地顧問(兵長)、診療所院長(軍曹)、タイ自動車顧問(伍長)、地元商社自営(上等兵)で、それぞれ「多忙」を楽しんでいるように見えた。

「戦友会」の人たちは、バンコクという都会の中で、在留日本人が永い間にわたって築き上げてきた基盤の中で、僅かだがあたたかな支援を得つつ、力をつけていったに違いない。

5 「戦友会」は、毎年8月15日に、タイのお寺ワットトリエツプで戦友達の慰霊を行っていたようである。境内には日本人納骨堂もあり、高野山から派遣された僧侶が奉仕していた。

敗戦直後、参謀辻政信元大佐がこの寺から黄衣をまとった僧侶姿に身を变え『潜行三千里』のスタートとなった寺でもある。

戦時中は、市内のベブリーの学校を英霊奉安所にしていたことと、20年7月に「日・タイ戦没者」のための合同慰霊祭がタイの名刹「ワットマハータート」で日・タイ両軍の軍最高司令官主宰で営まれたことが知られている。

1984年(昭和59年)正月、我が家に「戦友会」10名を招待した。純日本食材のおせち料理で共に正月を祝った。「大佐殿に招待されるとは光栄です」などと冗談を云いつつ、数時間を楽しんでくれた。この間、部隊での失敗談や笑い話は初めて聞く話も多かったが、この日も離隊した前後の心境や参加した作戦の話、亡き戦友の話になると口は重くなったが、部隊に関する非難めいた話は一件も出ていない。年月が経ったからか、そのように約束されているのかは判らない。

6 冒頭の「絵画」の話に戻る。望郷の念を含め、春を告げる鶯かと思ひ、日本野鳥の会に伺ったところ、主席研究員の方から、尾羽の数、色彩等から日本の鶯ではない、という丁寧な解説付き回答を戴いた。私の思い違いであり、はるか以前にその心境を脱し、現在は兵役を完遂した以後の人生を、自由に、力一杯生きる喜びと意気を伝えようとしたのだと思えるのである。

敗戦直後の混乱期に部隊を離れ、故国に戻らず、タイの土に還る決意をした裏には、一人一人に秘められた心の葛藤があり、決して他人には語らないと決めた決意のようなものがあるに違いない。

(補足) 当時、残留日本兵につき「取材」しようと思ったことはなく、今回思い出として記述しているので、記憶の誤りがあれば、ご容赦戴きたい。

### 広告目次

- (株) セレモア……………表紙3
- (株) 東京都民互助会……………表紙3
- ローレルバンクマシ(株)……………表紙4
- (株) 武蔵富装……………29
- 信和株式会社……………29
- メモリアルアートの大野屋……………47
- (株) 和泉家石材店……………48

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。